



## 松戸の学校選択制はどうなっている？

### 【白相さんのお話】

一橋大学大学院生です。生まれも育ちも千葉県です。学部の中から教育社会学に関心を持ち、親と学校の関わりがどのようなものであるかということを中心に見ていこうと思いました。松戸の学校選択制は一番ラジカルだという印象を持っています。その松戸の実態がどうなっているかということをお話したいと思います。

平成 13 年に議会で教育改革プランの提案があり、それから 2 年間かけて平成 15 年に教育改革アクションプランと教育資源有効活用実施計画が発表されました。教育改革プランは学校選択制を第一として、これから実現すべき松戸の教育政策を 50 以上に細分化して提案しているものです。教育資源有効活用実施計画は学校統廃合を中心に提案がなされました。学校選択自体は時代の趨勢とでもいえますが、学校選択制を支持する論者にもいろいろな立場があって一概には言えないのですが、いわゆる新自由主義的な観点からは、親に選択の自由を与えることにより、競争を煽って良くしていくということがあげられると思うし、昔から学校選択制を主張していた黒崎さんという学者は、選択を行うことによって学校の教育を正当化できると述べています。それまでは教員の立場に正当性を与えることで学校の正当性を保っていたが、親のチェックによってそのバランスを保とうというようなアイデアを提唱しました。

新自由主義とは別の観点、最近では行財政の問題というのが大きく絡んでいます。具体的には教育資源の節減、学校統廃合によって節減するということが行なわれていて、学校選択制によって学校統廃合が正当化されるというような事例が数多く見られます。そのやり方がえげつないと思うのは、まず「この学校を統廃合する予定」と公表する。そうすると親は廃校になる学校を選びたくない、なくなる学校にわざわざ子どもを行かせようとは思いません。競争によって淘汰されたから統廃合するというのは、順序から言えばまだわからないでもないですが、最近では統廃合予定の学校を公表し、行政が自分の手を汚さずに統廃合を実現することができるようになっている。

松戸はそういう側面がかなりあります。最初に教育改革が提案されたとき、ある程度学校選択の自由化に関しては意識があったように思います。議論が進む中で学校統廃合の議論も出てきたような印象があるのですが、それが合体したような感じがします。

### どういった学校が選ばれていて、どういった学校が選ばれていないのか

松戸の学校選択がどういった目的で行なわれているかということを見ると、教育改革プランの中では『くねらいについて』各学校は保護者とともに学校づくりを進めています。保護者の方の選択と学校参加により、保護者と一体になってよりよい学校づくりを進めることができると考えます』と書かれています。保護者が学校を選ぶことによって、学校により積極的な関わり方をし、家庭・地域との連携を強めることが、建前上は目的になっています。そうして始まった学校選択制が本当に親の参加を促しているのか。親がより積極的に学校にかか

わるようになってきているのか。そのことに関心を持ちました。それを見るためにまずどういう学校が選ばれているのか、選択動向を見ようと考えました。松戸市が平成16年度、19年度に行なった学校選択制についてのアンケートで、学校選択制を利用する親ほど学校との連携意識が強まると考えると回答しています。

都内の自治体の多くがホームページ上で学校選択の動向を公表していますが、松戸は公表していません。それで市教委に問い合わせたところ、「制度が5年目で定着の段階にはいつているところ。情報公開することで選択格差が出てしまうのではないかと。選ばれる学校と選ばれない学校が出てきているという情報が出てしまうと、更に風評によって選択が行なわれることになってしまふ。慎重に検討したい」ということで、1週間待ちました。その結果の回答が「学校に迷惑がかかるから公開できない」ということでした。そうしたやり取りを何度か繰り返し、結局、最終的には情報公開請求を行って開示されましたが、

16年度の資料はないということで、17年度からの資料を入手しました。

学区外からどれだけ入学してきたのか、学区外の学校へどれだけ出て行ったのかを、申立て制度利用と選択制利用それぞれ表にしてあります。

どういう学校が選ばれていて、どういう学校が選ばれていないのか、その理由までしっかり分析できていないのですが、その辺の実状を教えてくださいたいと思います。

この資料を見る限りでは、人気校と不人気校が如実に出てきています。先日『AERA』（9月15日号）で都内の選択制の動向をまとめた資料が出ていますが、やはり人気校と不人気校が出てきていて、学校間の人気の格差が広がっていると書かれている。やはり松戸でもそうした傾向がかなり見られます。減っているところはコンスタントに減っており、増えているところはずっと増え続けている。特に中学校で顕著です。かなり人気の差が激しいですね。一般的にどういうところが人気が出るかというと、アクセスが良いこと、学校の設備が良いこと、部活が充実していることなどですが、一番多いのは学校が近いからという理由です。学区が指定されてもそれより自宅に近い学校というのが実際にはありますから、近いから通うということが特に小学校では多いようです。それから市境にある学校は選ばれにくい傾向があります。選択肢が少ないということに不満に思う保護者も多いようです。

「他の地域だったらもっと選択肢があるのに」と。

そして人気校に隣接している学校は生徒を集めにくくなっています。



## 市教委は選択動向に非常に過敏になっている

まだ資料を十分に分析できていないのですが、少なくとも人気校と不人気校との格差があることはわかりました。でも良くわからないのは、市教委がこの資料をなぜ出ししづったかということです。

学校選択を正当化する理由として、学校が特色を作るとか、学校が特色作りをすることによって親のニーズにあった選択ができるとか、親の参加が今までより高まるとか、そのようなことが建前として用いられているわけですが、実際はかなり評判で選ばれている方が多いというのは市教委の人も言っています。でも、松戸市は競争をあおる目的で学校選択制を導入しているのではないので、資料を公開することが競争をあおってしまうことになると市教委は答え続けました。市教委が選択動向に非常に過敏になっていると感じました。しかし、学校選択制を導入する以上、こうした情報を公開すべきだと思います。

## 【フリートーカーキング】

- 平成 16 年度と 19 年度に行なわれた学校選択制についてのアンケート結果を見ると、小学校では通学距離や安全という面で学校を選んでいる保護者が 40%、学区の学校だから選んだというのが 43.6%です。小学校については学区外に大きく移動している傾向は見られないと感じていたのですが、今回の資料を見ると、そうでもなさそうですね。
- 中学校と違って小学校は学校数が多いので、ちょっと見ただけでは各学校の人数の差がどれほどの意味を持つのかがわかりづらい。でも、マイナス続きのところと、それなりに増加し続けているところとの差がやはりあります。
- アンケートでは出てきませんでしたが、中学校では部活が大きな選択理由になっているだろうと感じていました。
- 古ヶ崎小は毎年流出が多いですね。古ヶ崎小というのは、統廃合によって古ヶ崎南小学校が統合された学校です。ところが、古ヶ崎南小学校の学区の子どもたちは北部小や中部小に流れました。（その結果を受けて平成 19 年度から学区の見直しをしています）
- 中学校の選択動向を見ると、やはり部活動で選ばれて集中しているところがある。周辺環境が寂しいところが敬遠されている。安全面からか。駅から近い学校も選ばれているが、電車通学をしている生徒はいるのだろうか。
- うちの中学は全体で 10 人程度電車通学していると思う。自転車通学の子も多いですよ。でも、最近やはり徒歩で通えるという選択をする傾向に戻りつつあります。
- 競争をあおっていると言えるような結果になっていますね。

## 学校選択制導入で親の学校参加が活発になるというのは、行政が自分たちで出した目標それがどれだけアプローチできているのか レビューすべきです

- 意外だったのは、市教委が選択動向に過敏になっているということです。市民集会実行委員会が松戸版教育改革の検証をするために、昨年 10 月に市教委と話し合いをしたのですが、教育改革担当の参事監が「学校選択制は 80%以上の保護者から支持されていて、いい結果を出している。学校選択制を利用して選んだ保護者は積極的に学校に協力している」というような回答をしていました。
- 学校参加がより活発になっているということの調査はどのようにして行なっているのかが見えてこない。実際何を持って、活発になっていると評価しているのかがわからない。
- 私たちへの回答では、「学校へ足を運んだ保護者数が導入前より 13.2%増えている。学校説明会の内容が参考になったと評価する保護者が 10.3%増えている」具体的にあげた数字はその程度。
- 今の話は、学校を選ぶまでの話ですよ。反対論者がよく言うのは、「学校を商品のように選んで、その後は知らん振り」ということ。今の話は、どういう商品を選ぶかというのは念入りにしている。ではその後どういうふうに行っているかは見えてこない。



- 保護者へのアンケートでは、「選択制の実施によって学校と保護者の理解・協力が強くなると思いますか」という質問に対しては、「強くそう思う」と「そう思う」と答えたのは 30%程度。「あまりそう思わない」が 46%以上。「どちらともいえない」が 24%程度。選択制を利用したからといって理解・協力が強くなるとは親は思っていない。

- 「選択制が地域の教育活動に大きな影響を及ぼすと思いますか」という質問に対しては、「ほとんど影響がない」と「あまり影響がない」と答えたのは30%、「多少影響がある」「大いに影響がある」と答えたのが両方で67%になる。選択制を良しとしながらも、地域の教育活動に影響があるだろうと、大半の親が感じている。
- 学校選択制導入で親の学校参加が活発になるというのは、行政が自分たちで出した目標。それがどれだけアプローチできているのかがわからないまま。レビューすべきです。
- 市民集会の実行委員会が市教委と話しあった時に、「教育改革としてさまざまな施策をあげているのだから、それについての徹底的な事後評価をすべきだ」と言ったのですが、市教委は答えられませんでした。例えば、保護者対象の学校選択制についてのアンケートを行なっている、選んだ当事者の子どもであるとか、先生や地域へのアンケートは全く取っていない。保護者へのアンケートだけでは一面的になるから、先生方へのアンケートをとるべきだし、地域の人たちの評価も聞くべきだと言ったんです。
- もともとあまりビジョンのないまま学校選択制を導入したのではないか。東京などで行なわれている教育改革を見て、それをなぞるような形で実施したのではないか。だとしたら自分たちの施策に対して評価ができなくても当然じゃないのかな。



## 子どもたちの日常への影響は少なからずあると思いますね

- 学区外通学の子どもの数が増えると、安全面の心配が出てくる。防犯面で問題があって集団下校をする時、教師の手が回らない。車で迎えに来てもらったりしなくてはならない。それから地域学習の問題。小学校社会科では、地域→市→県→日本と同心円的に学ぶことになっている。3・4年生は地域学習になるのですが、学区外の子どもは違う地域から通学しているわけですから地域学習の意味をなさない。
- P T Aで新学期などに通学路の安全パトロールをしているところが多いのですが、学区外から来ている子どもたちへのフォローは全然できていない。
- 放課後の子どもたちの様子を見てみると、やはりクラスの友だち同士で遊んでいるようです。学区外でも近ければいいのですが、ちょっと遠い学区の学校へ通っていると、放課後友だちとなかなか遊べないという状況もあるでしょう。子どもたちの日常への影響は少なからずあると思いますね。
- 親としては、地域の評判の良くない中学へわが子を通わせるかどうか迷ってしまう。本人は友だちといっしょに学区外の学校へ行きたがっている。
- 幼稚園からのつながりというのも大きいのではないかな。今送迎バスを出している幼稚園が多いので、いろいろな地域から子どもたちが来ている。お母さんたちのつながりが幼稚園の時にもう出来上がってしまっている。だから同じ町会内でも、幼稚園が違くと付き合いが少なくなってしまう。
- 幼稚園の友だちが学区外の小学校へ行くとすると、それに左右されてしまう。元の根本内東小の学区で市境のところでは、皆柏市の小学校へ行ってしまうといえます。
- 子どもたちが地域の子ども同士でつながっていくというチャンスを、学校選択制は奪っていますね。

## 選択制で親の連携・協力が強まったと言うのなら、 PTAの委員決めに苦勞することはないはず

- 選択制で親の連携・協力が強まったと言うのなら、PTAの委員決めに苦勞することはないはず。みんなが嫌がらずに委員を引き受けてもらうためにはどうしたらいいかと四苦八苦している。登録制やポイント制まで導入して。
- 選択制はむしろ親の連携・協力を強めることとは逆の方向に作用しているように思える。
- でも、まわりの親たちを見ていると、選択制を望んでいる人が多い。制度としてどのようなかということあまり考えずに、わが子に良かれと望む親の気持を行政はうまく利用している。親としては、選べないより選べる方が良いと思うのはあたりまえ。そういう親たちに選択制の背景・問題点などをもう少し浸透させていく必要がある。
- 親心だけではなく、人情としても、選べるのと選べないのとどっちが良いかと訊かれたら、選べる方がいいというのはあたりまえ。自分の子どもにはいい思いをしてほしいという気持はあるわけで、その上で選べるんだっとなおいいという気持を利用している気がしてすらいと思う。
- 学校選択制を教育施策として導入するからには、学校教育の中身や子どもたちにとってプラスに働いているという具体的なものがなければ、施策としてマイナス。選択制を導入して、学校教育の教育内容がどう変わったのかという検証が全くされていない。地域との連携はどうなったかという調査もない。文科省の調査で、子どもの暴力事件が増えたという数字が出ていたが、全国各地で様々な教育改革が行なわれてきていても、子どもの状況がいい方向に向かっているというものが何も出ていない。



## 他の自治体で学校選択制導入が見送られた理由は、 松戸市で導入される時に市民や教員から指摘された問題ばかり

- 先日、江東区では学校選択制の見直しをしました。理由は、地域とのつながりが希薄になるというものでした。江東区では今人口が増えています、その人口増加に学校選択が対応できなかったということも考えられます。区内の学校統廃合は一通り終わっているので、学校選択を廃止して、各学校に児童・生徒がどれだけ入るかという見通しを立てやすくしているのではないかと意見もあります。
- 学校統廃合している最中にも湾岸部に新たなマンションがたくさん建てられ、以前の江東区の人口分布と大幅に変わってきているようだ。一方で統廃合しながら、一方では新たな学校を作っている。
- 松戸で廃校になった古ヶ崎南や根木内東の学区でも戸建の住宅が増えてきている。大規模校になってきている柿の木小の学区でも大きなマンションが建った。長期的な人口動向をちゃんとつかめていなかったのではないかと。大規模校がより大規模校になってしまう。選択制でも小規模校が敬遠される傾向があるので、小規模校はより小規模校になってしまう。選択制によって学校の規模の格差が出てきてしまう。
- 江東区と同じ時期に選択制を見直した前橋市は、学校規模の格差や男女比の偏りが出てくるという問題が理由だった。

- 今、新たに導入しようというところは少なくなっています。見直しの時期に入っていますね。佐倉市でも導入を見送りました。全国的に導入が見送られたところの理由をまとめると、「風評や噂による選択行動が行なわれる。特定の学校に希望が集中したり、特定の学校が避けられたりする。学校と地域の関係を希薄化させる。過度の競争を招き、学校間格差や序列化につながる。子どもの通学の負担が生じ、安全上問題がある。指定校変更制度で対応可能だ」ということです。まさに今学校選択制で起きていることですね。
- 松戸も申し立て制度で対応できるのではないかと思います。
- 選択制導入見送りの理由は、松戸市で選択制導入される時に市民や教員から指摘された問題ばかり。

### **不登校や暴力行為などの子どもの荒れは、学級規模や学校規模と深く関係している**

- 大きい学校がいいと親は選ぶが、それに根拠はない。松戸市は不登校の児童・生徒数が千葉県下でもかなり多いほうなのですが、松戸の小学校で何年間か不登校がゼロだった学校が3校あった。そのうちの1つが廃校になった根木内東小学校。他の2校も小規模校。学校の規模と子どもたちの居心地、安心・安全の学校というのは、深い関係があるのではないかと。先日の文科省調査の報道によれば、小学生の暴力行為31%増。その中で福島県は3年連続で暴力行為が一番少ないんですね。福島県は全国に先駆けて少人数指導を実施している。平成6年度から小・中学校全学年で30人学級を実施しました。その翌年から3年連続で暴力行為が少ない。先生方が一人ひとりの子どもの変化を正確にキャッチできて、深刻な状態になる前に指導・援助ができています。不登校や暴力行為などの子どもの荒れは、学級規模や学校規模と深く関係していると見えてくる。学校選択制で、大規模校が良いという風評によってどんどん選ばれてくると、子どもにとってはどんどん居心地が悪くなっていく。教育的に見ればマイナスの要素がある。
- 選択制で人気なのは、アクセスが良いとか、設備が良いとか、部活動が充実しているとか、自宅に近いと言われたが、この4点はその学校の教育内容とはほとんど関係ない。その学校でどういう教育をしているのかということが第一義的に選択の理由にならなければいけないのに、それが無い。子どもが豊かに伸びていくためには、教育内容が一番重要なわけだが、学校選択制ではそこがスポッと抜けてしまう。本来はどこの学校だったと大きく教育内容が変わるわけではない。

### **本来初等教育・中等教育というのは特色づくりをすべきものではないというのが、教育基本法の基本的な考え方**

- 学校の特色づくりを全面に出させて、それを選択の一つの条件にさせていくということを松戸市の教育委員会は打ち出した。スタッフ派遣はその際たるもの。でも本来初等教育・中等教育というのは特色づくりをすべきものではないというのが、教育基本法の基本的な考え方。どの学校に行っても等しく教育を受けるといえるようにすべきであって、この学校に行ったらいい教育を受けられるというような意味の特色を作ってはならない。そういう基本法の理念に反している。松戸の教育委員会は、こうした教育基本法の基本的な理念を深く読み取って教育行政をやるという点では、ちょっと危うい。文科省がパ

ッと出すものを議論せずに飛びついてしまっている感じが強い。それで誰が一番被害をこうむるかといえば、子どもたち。先生たちも次から次へとめまぐるしく施策を打ち出されるものだから、ほんとうに大変なようだ。

- 特色作りに関して言うと、教育委員会が「こういうプランがありますよ」といろいろ用意しておいて、「うちがやります」と校長が手を上げて実施する。私の父が働いている学校は、スポーツを重点的に行なうという特色づくりをすることを校長が選んだらしく、何やっているかという、校庭に「東京にオリンピックを誘致しよう」という垂れ幕を張っている。特色づくりを自発的に行なうのではなく、教育委員会が用意したメニューから校長が選んでいくというスタイルになっている。
- 松戸の教育改革をする前に設けられた教育改革市民懇話会で、委員だった小・中学校の校長の二人が、「学校の特色というのはそこに集まる子どもたち・親・地域・先生によって、自ずとできてくる。あらかじめ学校の特色を作って、それを選んで行きなさいというような、学校とはそういうところではない」と言っていました。実際に、松戸の中で特色づくりといっても、市教委の気に入らなければ予算をつけてもらえないわけですから、結局皆似たようなプランになってしまう。
- 学校の教育内容は、外からはよく見えない。入学してみても初めて本質的なことが見えてくる。外から見ていると問題を抱えた子どもたちが多く見受けられても、中に入ってみたら先生方が一対一で親身になって取り組んでいるとか。問題がある子が多そうだとすることでその学校を敬遠してしまったら、そこで一生懸命努力している子どもや親や先生たちの努力が認められない、報われない。選ぶということはそういう努力を切り捨ててしまうのではないかと私は恐れています。自分もその中に入って、問題があるのなら皆で一緒に地域の子どもの育てようよと、大変だけど皆でがんばって解決しようよと、そういう思いにつながると思います。



### 選択制で得るのは経済的に豊かな家庭？

- 選択制導入前から、もともと地域格差ってありますよね。地域の環境やどういふ家庭が集まっているか、つまり所得格差ですね。親が塾に行かせる能力のある家庭が多いか、少ないか。そういう地域の特色が学校の特色を作る。
- なぜ松戸がこういう教育改革をしたのかがよくわかりませんね。松戸にはこういう問題があるからこのように解決をするというような施策の作り方ではありませんでしたから。
- そうなんです。必然性がわからないんです。
- 教育改革市民懇話会でも、学校選択制について十分話し合われたわけでもありませんし、むしろ否定的な意見のほうが多かった。統廃合についてはもっと話が出ていなかった。それなのに、選択制はすぐ出されて、すぐ実施でした。
- 非常に拙速な印象がありますね。
- 松戸市の教育行政にとって、学校選択制を続けていくメリットってあるのでしょうか。ただやめられない、今やめたら親をうまく説得する材料もないし、というところでしょうか。
- 市教委は、「今定着に重要な時期だから」という言い方をしています。
- 教育改革アクションプランでいくつも施策を上げましたが、ほとんど立ち消えですね。

その中で着々と進められているのは、小金中学校をパイロットスクールとして建て替えること。来年度開校です。部分的ですが建物が新しくなり、特色ある教育をしようとしているわけで、選択制で人気が出てくるのではないか。

- 同じ公立でありながら、人目的にも手厚く配置されるわけですし。
- 松戸の学校選択制が何のメリットもないとわかってきたのにやめられないのは、親の支持があるからだと思う。親が選べないより選べる方がいいという漠然とした支持をしている限り、やめられない。どのようにしたら問題の共有ができるのか。
- 生の子どもたちの声を引き出すことが大切だと思う。
- イギリスで学校選択制が最初に導入された時に、誰が得するかというと、教育に関心の強い親がいる家庭、つまり経済的に豊かな家庭、そういう人たちが得をする。父が江東区で働いていたとき、学校が統廃合された。前から計画されていたのですが、廃校になる最後の頃は一年に3人程度しか入学しない。就学援助を受けている家庭の割合とか、片親の子が半数くらいいるとか、そういう家庭の子が多く集まっていた。選択制と家庭の経済力の関係というのは強くあると思います。
- 選択制で学区外の学校を選んでいる家庭の平均所得というような数字はないのでしょうか。そういう調査があれば、選択制で得するのは経済的に豊かな家庭ということが裏付けられると思うのですが。所得の高い層が選択制によって移動している。取り残されているのは経済的困難を抱えている家庭というようなことが数字として出されるといいのですが。
- 新自由主義的な改革を一番初めに行なったのは実質的にはオーストラリア。そこでも学校選択制によってものすごい格差が出てきた。金持ちの家庭はどんなに遠くても学校まで車で送り迎えする。そういう余裕のない家庭は近くの学校へ行く。4年か5年で、教職員組合が反旗を翻して、選挙で政権が変わり、学校選択制を廃止した。学校選択制は貧富の差と深く結びつく。
- どここの学校へ行っても、子どもたちが最高の教育を等しく受けられるということが、公教育。その理念に反しますね。
- ものすごいスピードで教育改革が行なわれてきて、そのほころびがあちこちで出始めているという気がします。



### 【最後にもう一度、白相さんから】

- 市教委の情報開示に関する態度は、私が学生だからなめられていたのかなと思います。市の情報は基本的に市民のもの。その市民というのは松戸市民という限定的なものではなく、anyone（誰でも）ということです。それが見られないのはどうしてか。入手するのに1ヶ月以上かかってしまいましたが、情報開示請求したらすぐ出てきました。学校名も公開されましたから、この資料は公開しても大丈夫だと思います。ぜひ活用してください。
- PTAのよさというのは membership がかなり開かれているところだと思っています。学校の運営に参加するということ、学校評議員とか学校運営協議会とかいろいろありますが、それらは非常にアクセスしにくい。PTAというのはもっと開かれているだろう。理念的には、知り合いの教員に話を聞いたところ、大規模校を親が選ぶ理由として、PTAの委員になる確率が低いからというのがあったそうです。



- 学校選択制についての非常に素朴で個人的な意見なんですが、自分が親になったとき、確かに選べたほうがいいなと思うところがあります。自分と自分の子どもにはいい思いをさせたいという気持と、それでも制度的な観点から見たときに「長期的にはこの制度は良いことをもたらさないぞ」と思う気持と、自分はいったいどうするんだ。そういう葛藤があります。当事者になったときに、そこで踏みとどまれるのかどうか、自分が試されているなあという印象を持っています。